

人と人が 居心地よく 住むための 空間とは

小林 秀樹

Kobayashi Hideki

開放的な空間を

居心地よく感じる日本の家族。
大切なことは住みこなし

はじめに 個室化は家族を疎遠にする？

にローテーションしてもらおうという実験である。その結果は面白い。DKから遮断された玄關脇の個室に住むと、3人とも共通してDKから足が遠のき寂しく感じていた。

この結果から、「個室は親子関係を疎遠にする」という可能性もありそうだが。しかし、実態はそうではない。子ども部屋に閉じこもる場合もあれば、居間によく出てきて密な親子関係を築く場合もある。逆に、子ども部屋がなくても、実家を離れた後は自然に自立する子どもが多い。つまり、個室の有無が、家族関係に直接影響を与えているわけではないのである。

おそらく重要なことは、個室の有無にかかわらず、それに適した住み方、養育態度をとっているか否かである。先に紹介した学生シェアハウスでも、寂しく感じたとしても、自ら積極的にDKに顔を出す住み方をつけていれば、むしろ、プライバシーと交流を選択しつつ暮らしを楽しむことができる。

居心地よい住まいの鍵は 「住みこなし」

大切にしている行動様式が発達し、逆に個室を重視した間取りでは、会話を通して理解しあう行動様式が発達する。というより、そのような行動様式を発達させることで、いずれの間取りにおいてもコミュニケーションは育まれるのである。

居心地よい住まいとは、特定の間取りや空間を指すわけではない。その空間が家族によってうまく住みこなされている状態を指している。逆に、間取りと住み方がずれていると、人間関係の希薄化や、ストレスあるいは過度な密着が生じやすい。例えば、壁のない一体的な空間において気遣いや遠慮の行動様式を身につけなければ、プライバシーの摩擦からストレスが生じるし、個室化の中で気軽に会話する習慣を身につけなければ、人間関係の希薄化を招くことになる。

子どもの成長で 大きく異なる住みこなし

人に、小学生でも母親と一緒に寝ている場合が多いと伝えられると、とても驚く。しかも、そのときに、母子と父親が別室で寝る「夫婦別寝」が2割程度みられると聞いて、さらに驚く。夫婦は一緒に寝るのが当たり前という感覚からは理解しにくいようだ。夫婦別寝は、子どもが中高校生で減るが、子どもが巣立って夫婦のみになると、再び大きく増加している。いずれにしても、個室が活躍するのは、小学校高学年以後である。さらに、面白いのは、そのナワバリの形である。ナワバリとは、そこを自分の場所だと思いい支配することであるが、調査では、家具配置や飾り等の「しつらえ」を誰が決めているかにより推定できる。その結果をみると、子どもが個室を使うようになって、さらに数年は、母親が子ども部屋のしつらえを決め、自由に出入りし、そして掃除をしている。つまり、長期にわたる母子の一体的暮らしを経た後に、子どもは個室を使いこなしとして自立するのである。

このような実態を踏まえると、個室批判論も擁護論も根拠が弱いことが分かる。日本の一般的な家庭では、子どもが小さい頃はLDK中心、中高校生になると個室を使いこなしというように両面性をもっている。もちろん、これは早期に子ども部屋を使いこなす米国の住み方とは異なる。しかし、それは差異であって、優劣ではないと考えている。

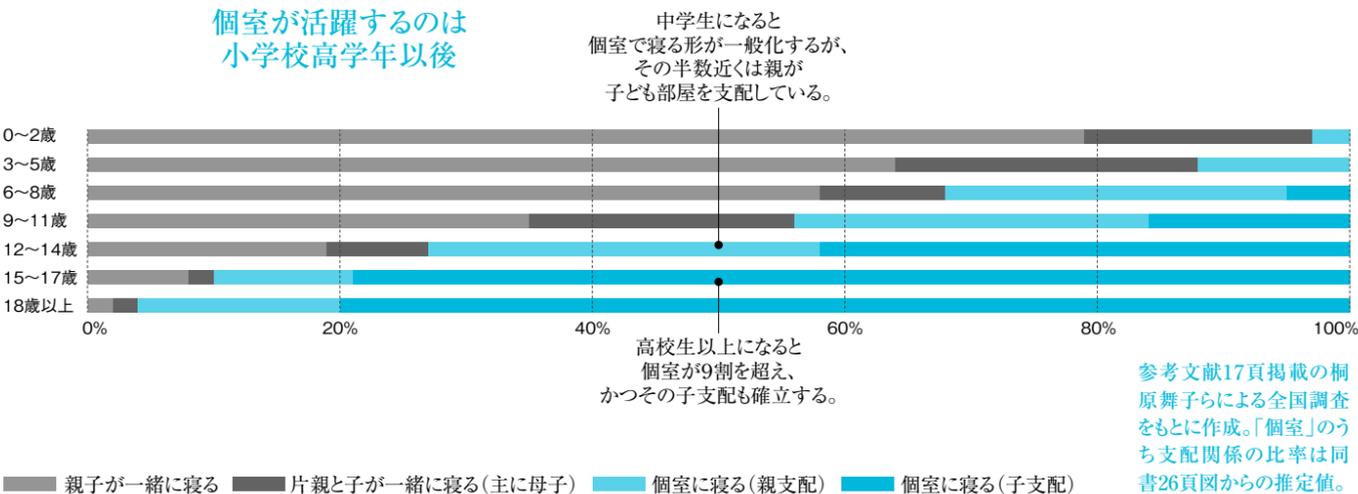
床上文化に基づく 温情家族の住み方

個室のない一体的空間であっても、家長の場や接客の場など、上下関係に基づく使い方のルールが明確であった。日本に住む人々の生活文化は、ここ半世紀ほどで大きく変化した。現代にながらる中下層武家を見ると、①女や子どもの個室はない、②部屋の独立性は低い、③ハレ（接客等）の場を重視する、という特徴をもっていた。そこには、家父長を中心とした封建的な家族が住み、

こばやしひでき／千葉大学大学院工学研究科教授。専門は住環境計画。東京大学大学院工学研究科博士課程卒業。建設省建築研究所勤務、千葉大学教授などを経て2007年より現職。おもな著書に『集住のなわばり学』ほか。

Chart 1

子どもが寝る部屋とナワバリのあり方



Special Feature
"Cozy Living"

Part 9

これに対して、現代住宅は、①個室がある、②部屋が独立している、③家全体がケ（日常生活）の場である、というように逆転している。その変化の過程では、女性も子どももプライバシーをもつという「平等家族」が理想とされた。しかし、現実はそのようになってはいない。かつての父親主導から母親主導へと変化し「温情家族」の特性を示している。そして、子どもが成長するとともに母子が対等な「友達家族」へと変化する（Chart 2）。

温情家族とは、封建家族と同じく、何らかの上下関係をもつ順位制集団の一形態であり、庇護と甘えに基づく上下関係を特徴としている（詳細は41頁末掲載の参考文献）。

このような温情家族は、開放的で一体感のある住まいで育まれ、また、そのような空間を居心地がよいと感じる。ここでは、互いに別々のことをしていても、同じ場にいることが安心感を生み出す。その中で、遠慮や気遣い、あるいは空気を読むという行動様式を自然に発達させるのである。

ところで、なぜ、このような開放的な住み方が根強いのだろうか。その理由は、床上文化の持続にある。靴を脱いで床上にあがると、そこはすべてウチの空間であり、家族の一体感を重視する住み方を誘導しやすい。日本の住空間は大きく変化したが、その中でまったく変わらないのが玄関で靴を脱ぐ床上文化なのである。

開放的な住み方から 個室重視への変化

30%が閉じこもり傾向、約15%が逆に母子密着傾向となっていた（参考文献）。

本格的な引き籠もりになった段階では、それを解決する力は住空間にはない。解決には父親の役割が大きいとされるが、筆者の手に余る課題である。住空間ができることは、そうならないように小中学生までの住み方に留意することである。アメリカでは、幼児の段階から個室を与える一方で、子どもに家事を手伝わせ、親子の会話を欠かさないと養育態度が重要とされる。一方の日本では、前述したように家族が一緒にいる居場所づくりを大切にしている。

住みこなしを誘発する 柔軟さをもつ空間

以上の特徴は、現代住宅の間取りに表れている。よくみられる間取りは、LDKと和室がつながる形式に個室を加えたものだ。この和室は、幼児のときは母と子の添い寝の場所として活躍し、その後は子どもがゲームをしたり、洗濯物を片づけたり、父親が寝ころぶ場所になったりする。また、来客時には、荷物置き場にちょうどよい。つまり、家族の成長段階に応じてうまく使い分けられており、開放的で一体感のある暮らしを支えている。

また、卑近な例で恐縮だが、筆者は狭い家に不釣り合いな大きなテーブルを購入し、それを居間に置いた。子どもたちは、そのテーブルで宿題をしたり、工作やゲームをした。大きなテーブルとソファの両方置ける広さがあれば別だが、どちらかならばテーブルを薦めたい。その方が、多様な住み方を受け入れつつ居場所づくりをしやすいからだ。

さらに最近では、居間中心型の間取りが増えている。いわゆる「リビングイン階段」である。居間の吹き抜け階段は、冬季の暖房に支障があるとして避けられてきたが、床暖房の一般化、断熱性の向上等により解決されつつある。このため、家族のふれあいを重視して、居間中心型が人気となっている。

以上のような、リビングと和室、大きなテーブル、居間中心型は、いずれも日本の温情家族の住み方にマッチしている。それらを住みこなしつつ、中高校生になると個室を使いこなししていく。つまり、間取りは3〜4LDKだが、そこで展開する暮らしは適宜変化させる。それが、居心地よい住まいとして日本の家族が出した答えである。

残された課題 —— 近隣に開かれた住まい

た住まいが大切になっている。そのためには、道側に窓があるだけでも効果がある。カーテンを開け閉めすることで、交流と遮断を適宜選択できるからだ。さらに縁側があれば、より交流の場として望ましいだろう。しかし、多くの現代住宅は、壁で閉ざされている。これでは、住み手が「住みこなし」ための手がかりがない。

また、玄関の引き戸は、全開、半開、全閉と状態を選択できる。全開はいつでも入っておいでというサインだ。半開は、様子を見てから入っておいで、全開は今がダメというサインだ。これも、住みこなしを誘発する装置のひとつである。

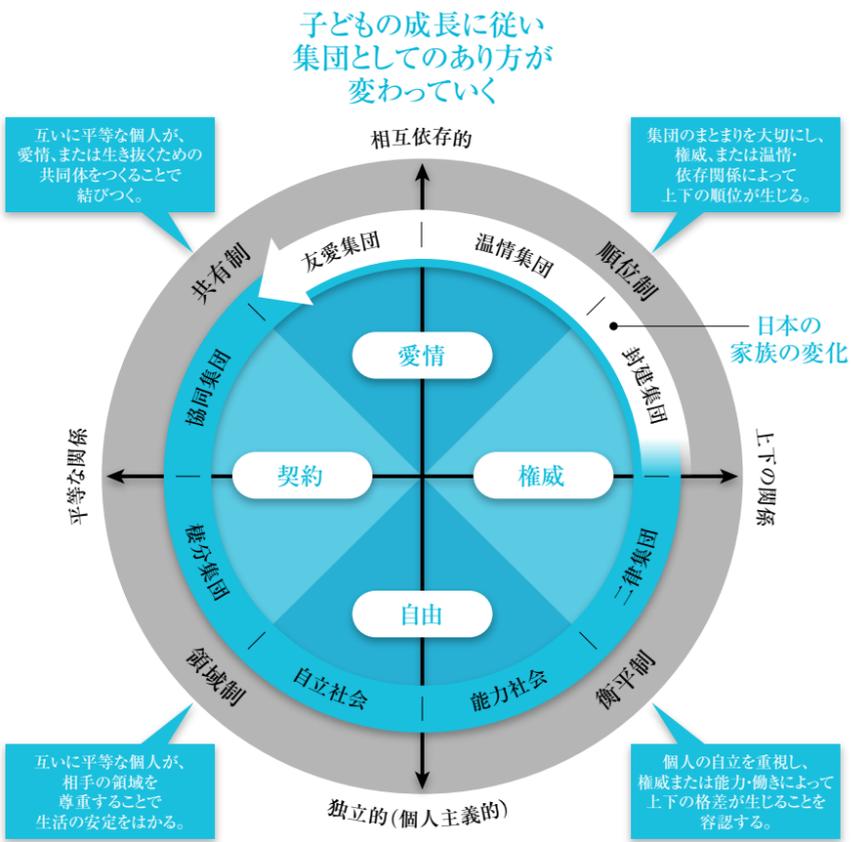
同様に、家の前の植木鉢も、住み手の人柄を伝え、そして植木草花の手入れに外に出ることで近隣と顔を合わせる機会を増やす。このことは、犯罪者にも伝わる。植木鉢が奇麗に置かれていたり、犯罪者は「世話好きな人が住んでおり、何かあったらすぐ警察に通報しそうだ」という印象をもつそうだ。これにより、地域の防犯性は高まる。植木鉢を「表出」と呼んでいるが、これを促す場が大切になる。

住まいにとって大切なことは、住みこなしを誘発する柔軟さをもつことである。住み手は空間と対話し、それに適した住みこなし方を身につけたり、逆に空間のしつらえを変化させる。しかし、対話しやすい空間、しにくい空間がある。リビングとつながる和室、大きなテーブル、外部に開かれた窓、引き戸、縁側、表出の場、等々。これらはすべて、住み手が対話しやすい空間や装置である。

このような住みこなしを誘発する空間に配慮することが、「人と人が居心地よく住むための空間とは」に対する答えである。

参考文献「居場所としての住まい——ナワバリ学が解き明かす家族と住まいの深層」小林秀樹著、2013年、新曜社

Chart 2
日本の家族がたどる集団タイプの変遷



人間の集団を4つの行動様式に分類し、さらにそれらを細分化して8つの集団タイプに分類する。これに日本の家族をあてはめると、「封建集団(家族)」から「温情集団(家族)」に転化し、子どもの成長により「友愛集団(家族)」になっていくパターンが典型とみられる(参考文献17頁の図をもとに作成)。